国語　学びの定着と、学んだことを主体的に活用

POINT Ⅰ
知・技

学びの定着のための工夫

子どもたちが学ぶべき内容に自然と多く触れ合うような機会を意図的に設定することで、だんだんと知識が定着していくのではないだろうか。

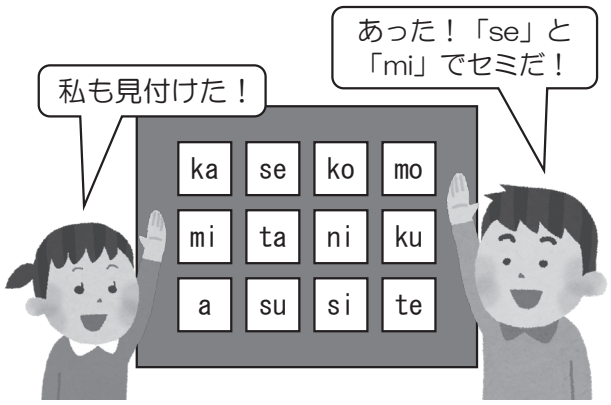
子どもたちが学んだことを身に付けるためには、学習内容を活用する機会を多くすることが大切だと考える。小さな子が親の話すことを聞いたりまねたりするうちに自然と言語を獲得していくように、ローマ字や漢字についても、日常的に使うことで身に付く部分は多いと考える。

そこで、ローマ字や漢字を使った言葉づくりをしてみてはどうだろうか。意図した言葉をつくるために、文字を組み合わせる活動を行う。言葉をつくる過程で自然とローマ字や漢字にふれることができ、繰り返し取り組むことで次第に理解が深まり定着していくと考えられる。今回は、その実践例を紹介する。

Ⅰ　ローマ字言葉づくり

⑴　「ka」「ne」などローマ字表記された 50 音カードを用意する。裏面には平仮名を書いておく。

⑵　カードを組み合わせて、言葉をできるだけたくさん作る。



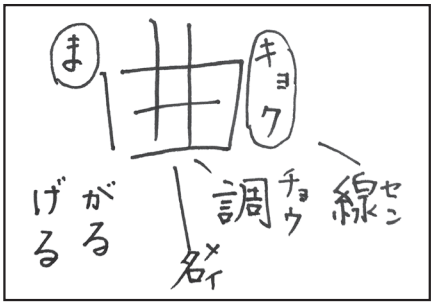
はじめのうちは裏の平仮名を見ながら言葉づくりをするのもいい。慣れてきたら、ki＋t＋te のように促音「っ」を入れた言葉づくりや、ヘボン式ローマ字を取り入れるなど、実態に応じてやり方を変更することができるので、段階的に学習ができるだろう。

２　漢字言葉づくり

⑴　漢字一文字を決め、音読みや訓読み、送り仮名を書く。

⑵　その漢字を使った言葉を考え、その漢字の周りに漢字を加え、どんどん言葉をつくる。

⑶　友達と交流をしながら、更に記述を追加していく。



【子どものワークシート例】

いろいろな熟語をつくる学習を通して漢字を単体で理解するのではなく、言葉として捉えることができ、理解も深まりやすくなるとと思われる。

言語事項は、普段の生活の中で継続的に活用する機会を設けていくことで確かな知識として定着していくだろう。

するための指導の工夫

豊頃町立豊頃小学校　教諭　川島　　翔

POINT 2
態度

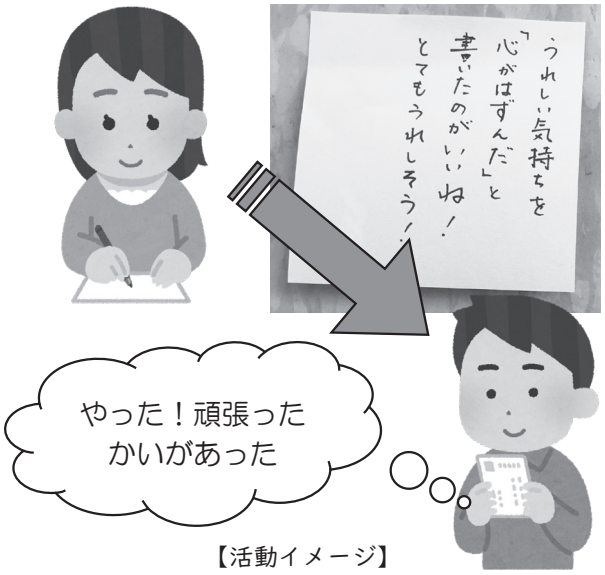
主体的に学習に取り組むための工夫

子どもたち同士の交流の中で、観点に沿って互いのよさを評価し合う活動を設定することで、学習に対する意欲が高まり、子どもたちの主体性の育成につながるのではないだろうか。

子どもたちが主体的に学習に取り組むようになるには、学習したことを実際に生かすことができ、自分の学びに自信をもてるようになることが大切だと考える。そこで、一つの例として「作文感想交流」の実践を紹介する。交流の方法を工夫することで、より前向きに学習に取り組むことができるだろう。

＜活動の流れ＞

1　作文と付せんを自分の机に用意する。
2　友達の席に座り、友達の作文を読む。
3　読んだ後に、作文のよかったところや思ったことなどを付せんに書き、作文の裏に貼る。
4　他の友達の席に移り、２・３の活動を繰り返す。
5　自分の席に戻り、付せんに書かれている内容を読む。



【活動イメージ】

＜活動のポイント＞

1　この交流では、付せんに書くべき内容の観点を子どもたち自身が理解していることが大切である。そのためには、まず作文の学習を始める際に、重視する指導事項を明確にしておく必要がある。観点を意識して作文を書くことで、友達の作文を読む際の視点がはっきりとし、より効果的な活動になる。

2　付せんを使うことで、書くスペースが限られるので、端的に伝える練習にもなる。

3　交流中に他の友達のコメントを読むこともできるので、どのような観点に注目しているのかを参考にしたり、別の視点で書いてみたりすることもできる。

4　友達からのコメントを読むことで、自分の学習したことが周りにも認められていることを実感し、さらに主体的に授業へ参加することができるようになる。

観点をはっきりさせた交流を学習の中に位置付けることで、お互いのよさを認識することができるため、学習に対する意欲が高まり、子どもたちの主体性につながっていくのではないかと考える。

社会「何で？」を大切に、子どもの「わかった！」

POINT Ⅰ
知・技

知識と知識をつなげる板書の工夫、資料の読み取り方の指導の工夫

知識は新しい知識と結び付いたときに価値のある知識と変わっていき、子どもの中で生きた知識に変わる。資料ごとに見方を丁寧に教えて、読み取る力を高めていく。

３学年での社会科において身に付けるべき知識及び技能を簡単にまとめると次のようになる。

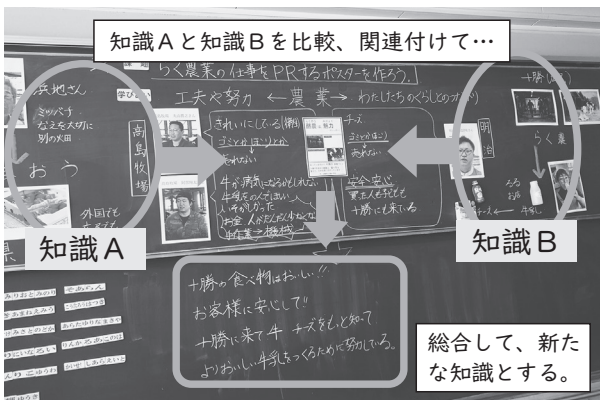
> ○「地域の様子」「生産」「消防・警察」「地域の移り変わり」について、時間・空間・相互関係の３つの視点に着目しながら理解すること
> ○見学・調査活動をしたり、様々な資料で調べたりして、白地図や年表などにまとめること

【比較・関連・総合を意識した板書例】

これらの指導事項を、単元での課題を追究したり解決したりする活動を通して、確実に身に付けることが肝要だと考えられる。具体的に２つの実践例を紹介する。

Ⅰ　板書の工夫（知識Ａと知識Ｂを結び付ける）

ある知識とある知識が結び付いたときに子どもたちの中に「分かった！」という気持ちが生まれるだろう。そのためには、日常から子どもの考えが視覚化された板書の工夫を大切にしていきたい。板書のポイントは「比較」「関連」「総合」することだと考えられる。



写真は「農家の仕事」のある授業の板書である。子どもたちは、「福岡県のあまおう」「買う人のことを考えている」という既習知識がある。そこに新たに「十勝は酪農がさかん」「牛乳を乳製品に加工している」というような知識を加え、福岡県と十勝を比較する。比較した中で出てきた言葉を、矢印や囲いを使って関連付け、最終的に「どちらも買い手のために安全・安心を心がけている」とまとめていく。耳慣れない用語も、他の知識とつながることで生きた知識として、子どもたちの中に残るであろう。

２　資料の読み取り方を丁寧に教える

資料の読み取りから、子どもの考えを広げ深めていくことも多いので、導入の段階で子どもたちに資料の読み取り方を教えておくことが大切だと考えられる。

⑴　写真・図・映像から読み取る
　①　何をしているのか？どんな様子か？
　②　どういう関係にあるか？
⑵　地図から読み取る
　①　どの方位に、何があるか？
　②　時間が経って、増減したものは何か？
⑶　棒グラフから読み取る
　①　何のグラフで、単位は何か？
　②　「多い」「少ない」どんな傾向にあるか？

これらを「分かったこと」としてノート等にまとめ、「考えたこと」として自分の言葉で表現していくことで理解は深まると考える。

を引き出す授業づくりの工夫

音更町立音更小学校　教諭　保志　元輝

POINT 2
態度

「何ができるようになればよいのか？」ゴールが明確な単元計画の作成

子どもがよりよく学びを進めるためには、子どもたちが最終的な姿をイメージできる単元計画の構想が必要不可欠である。「何で？」の問いの連続で、授業に一貫性をもたせていく。

子どもたちが生き生きと学びを進めていくためには、「何ができるようになればよいのか？」が具体的に分かる単元計画の作成が必要であると考える。社会科の単元計画を作成する上で大切だと感じる３つのポイントについて、「消防・警察」の実践例を紹介する。

１　指導事項から最終的なまとめを考える

何ができるようになればよいのかは学習指導要領で確認していく。この単元では、

> 知各機関で連携して緊急時の体制をとっていることや、地域の人々と協力して火災や事故の防止に努めていることを理解する。
> 思関係機関や地域の人々の諸活動を捉え、相互の関連や従事する人々の働きを考え、表現する。

とあり、「連携・協力」がこの単元でのキーワードだと考えられるので、消防・警察・地域の人々がどのように関わってくらしを守っているのかが分かる関係図にまとめるように設定した。

２　問いを引き出し、必要感のあるゴールへ

導入段階では、子どもたちの「何ではやい？」「誰がやるの？」といった問いを引き出せるように努めた。関係図にまとめることでその秘密が分かることを伝え、調査活動に入っていく。

３　計画的な振り返りの設定

単元のはじめに学習課題を立てるが、調査活動の中で新たな問いが生まれることも少なくないだろう。計画的に振り返りを行い、子どもの考えを表現する場を設定した。

段階	時数	学習内容	知識	思考	態度
つかむ	1	自分たちが安全なくらしができているのはなぜかを話し合う。		○	
	2	火事や事件・事故が起きた時に、どのような人が、どのような働きをしているかを考える。		○	
調べる①	3	火事の件数や火事の原因などの資料を基に学習課題を立て、見学学習の計画を立てる。		○	
	4	まちの消防署にて見学学習を行う。消防署職員へのインタビューやフィールドワークを通して、学習課題について調べる。	○		
	5				
	6	まちの消防施設や地域の消防団の取組について知る。	○		
	7	火事からくらしを守る人々の働きについてまとめ、振り返る。			○
調べる②	8	事件・事故の件数などの資料を基に学習課題を立て、見学学習の計画を立てる。		○	
	9	警察署や交番にて見学学習を行う。警察署職員へのインタビューやフィールドワークを通して、学習課題について調べる。	○		
	10				
	11	まちの防犯体制や地域での取組について知る。	○		
	12	事件・事故からくらしを守る人々の働きについてまとめ、振り返る。			○
まとめる	13	消防署と警察署の働きについて、比較し、まとめる。		○	
	14	自分たちのくらしを守る人々の取組について、関係図にしてまとめる。		○	
	15	友達と関係図を交流し、単元の学習を振り返る。			○

【ゴールを意識した単元計画の例（消防・警察 15 時間扱い）】

算数　既習事項とのつながりを生かす指導と、

POINT 1
知・技

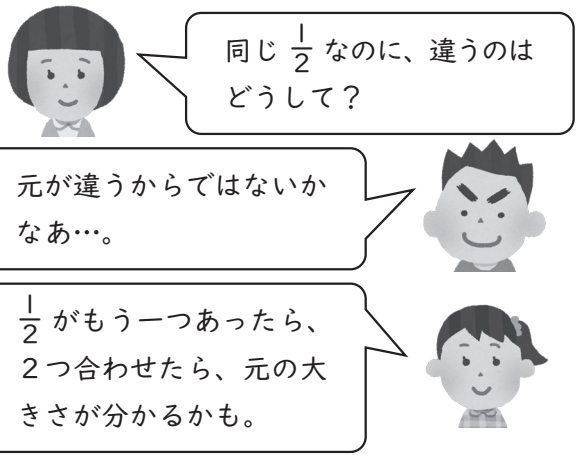
既習事項を生かし、分数の示す数量の意味を理解する

第２学年での学習を生かして、もとの大きさを意識した分数の示す数量の意味と表し方を理解することで分数に対する正しい理解を身に付ける。

２学年では、$\frac{1}{2}$ や $\frac{1}{3}$ など簡単な分数について知り、元の大きさに着目し、数の大きさについて考える指導をしている。３学年の分数の学習では、１mや１Ｌといった決まった大きさを等分した分数（量分数）を扱うことに留意して指導を進めることが大切である。

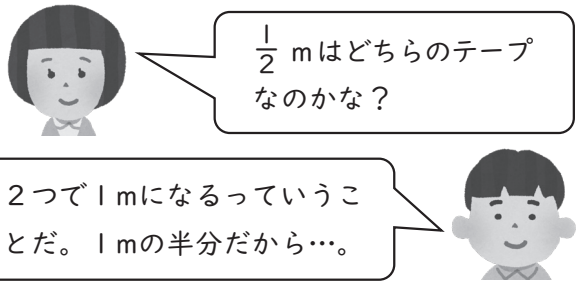
１　$\frac{1}{2}$ という大きさ

２つの「$\frac{1}{2}$ のケーキ」の線分図を提示して、長さの違いが、もとになる数量の違いであることに気付かせたい。

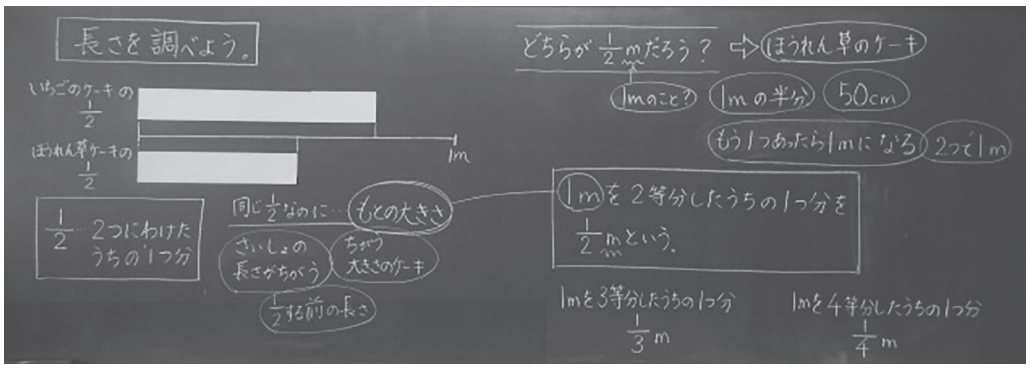


子どもたちは、２学年での学習を思い出しながら、$\frac{1}{2}$ という大きさについて考えるだろう。「２つに分けたうちの１つ分」という考え方を価値付けながら、分数の意味の理解を深めさせたい。

２　$\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{2}$ mの違い



ここでも、子どもたちは、これまでの学習を使って、$\frac{1}{2}$ mという大きさについて考え始めるだろう。「m」という単位に着目させて、$\frac{1}{2}$ mは１mを２等分したうちの１個分であることを理解させたい。そして、$\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{2}$ mが違う意味をもつことを理解することで、分数が示す数量の意味への理解を深められるだろう。



【板書例】

思考のつながりを生み出す工夫

幕別町立札内南小学校　教諭　加賀谷佳美

POINT 2
思・判・表

子どもたちの思考のつながりを生み出す場面設定の工夫

子どもたちの思考をつなげていくことで、新たな表現形式（二次元表）を生み出していける場面設定の工夫。

表とグラフは、３学年で唯一のデータの活用の領域である。社会や理科で見慣れている棒グラフのかき方や読み方の学習で終わるのではなく、データを整理するよさや、グラフに表すことのよさを感じさせたい。そこで、子どもたちが整理したくなる場面を設定し、二次元表を子どもたちが作り出す実践を紹介したい。

１　自分たちの「思い」がデータになる

「乗りたい自動車を調べてまとめよう」と場面を設定する。

①　乗りたい自動車の形を３種類から選ぶ。
②　乗りたい自動車の色を４種類から選ぶ。

ネームプレートを使用して整理すると分かりやすいだろう。

①乗りたい車の形

【セダンタイプ】　Cさん　Dさん　Fさん　Gさん

【ワゴンタイプ】　Aさん

【クーペタイプ】　Bさん　Eさん

②乗りたい車の色

赤色　Aさん　Bさん　Eさん　Fさん
白色　Cさん
青色　Dさん　Gさん
銀色

２　困り感が二次元表を作る

一番人気はどれだと思う？

赤だよ！一番人数が多いもの。

でも、セダンタイプも多いよ。

待って。私は赤を選んだけど、セダンタイプじゃないよ。

ここで、子どもたちは、これまで学習してきたグラフや表では表しきれないことに気付く。その困り感が、子どもたちの思考を活発に動かしていく。

形と色を別々に選ぶから、分かりにくいんだよ。

色を形の横に置けばいいんじゃない？

えっ、どういうこと？

こういうことじゃない？

【セダンタイプ】

赤色	白色	青色	銀色
Cさん	Dさん	Fさん	Gさん

これなら、一番人気も分かる。

この問題は未習事項を含んでおり、子どもたちだけで解決することは難しい。その困り感を共有し、子どもの思考のつながりを生かしつつ、無理なく新しい形式を指導することができるだろう。

理科　調べたいことを解決していくことで、

POINT Ⅰ
思・判・表

「くらべる」ことで調べる方法を計画する

調べたいことは、どんな場合とどんな場合を「くらべる」と調べられるのかを計画する活動を大切にすることで、思考力、判断力、表現力等を育む。

小学校３学年の子どもにとって、理科は初めて学習する教科であり、興味・関心が高い。また、学び方の基礎を培う大切な学年となるだろう。

子どもたちは、自然の事物・現象に触れることにより、不思議と感じることや知りたいと思うこと、それらを解決していく問題解決的な学習を通して、資質・能力を伸ばしていくだろう。そして、その学習過程の中で、調べ方を考える「計画」の時間を工夫することで、思考力、判断力、表現力等を育んでいきたい。

Ⅰ　学習過程

問題解決的な学習の基本的な流れは図のようになるだろう。

(1)　見付ける（自然の事物・現象に触れる）
(2)　問題を作る（調べたいことを考える）
(3)　予想する
(4)　計画する
(5)　実験・観察する
(6)　結果を確認する
(7)　結論をまとめる

【問題解決的な学習の基本的な流れ】

２　「計画する」の時間に工夫を

「Ⅰ　学習過程」の中で、「(4)　計画する」活動を大切にすることで、思考力、判断力、表現力等を育むことにつなげたい。

計画する際には、個人思考・グループ協議等の時間を確保したい。

(1)　どうすれば確かめられるのか。
(2)　結果はどうなれば予想通りといえるのか。

等について、子どもたちに考えさせたい。そのため、何と何をくらべたらいいのかという視点をもたせたい。

３　「太陽と地面」の学習では

では、「太陽と地面」の単元を例に考えてみる。本単元の後半では、日なたと日かげの性質について実験・観察から学んでいく。

問題を作る
日なたの地面が日かげよりもあたたかいのは、なぜかな？

予想をする
太陽の光であたためられるからだ

日なただけ調べればいいかな？
１回温度を測れば調べられるかな？

どんな道具があれば
調べられるかな？

計画する
日なたと日かげの温度の変化を調べよう
(1)　日なたも日かげも温度を調べる
(2)　時間を空けて温度の変化を調べる
(3)　温度計を使えばいい

実験・観察の計画を立てる際には、話合いの場を設定し、見通しをもたせながら子どもたち自身の力で進められるようにしていきたい。

子どもの資質・能力を育む工夫

幕別町立札内南小学校　教諭　斉藤　雅彦

POINT 2
知・技

調べたいことを調べるために使う道具

調べたいことを調べるために、必要な道具の使い方を身に付けていくことで、知識・技能の確実な定着を図る。

理科において、適切に道具を用いて実験・観察する知識・技能が必要となる。

「道具を使えるようにならなければならないから学ぶ」のではなく、「調べたいことを調べるためにはこんな道具がある」から使うというように、子どもの興味・関心に基づいて知識及び技能を定着させていきたい。

1　方位じしん

「太陽と地面」の単元で使用する。

方位を知るために、方位じしんを使う

↓

太陽や影がどちらに動いたかを確かめるために、毎回同じ向きで記録を取るのに使う

2　温度計

「太陽と地面」の単元で使用する。

温度を測るために使う

↓

温度の変化をくらべるために、毎回の温度を記録するのに使う

使用する目的が決まっていることで、「日なたの地面を計測する際には、どうしておおいをするのだろう」という条件についても、考えることにもつながるだろう。

【温度計を使う子ども】

3　こん虫の観察容器

「チョウを育てよう」の単元で使用する。

こん虫を育てるならこの容器

↓

チョウはキャベツ畑で育つからこの容器
トンボは水の中で育つからこの容器

育てるものの特徴に合わせて容器を選択することを考えることにつながる。

理科で扱う道具に対して子どもたちの興味・関心は高い。それを、知識や技能として身に付けることを最優先として学ばせようとするあまり、肝心な意欲を失うようなことにはしたくない。理科で扱う道具は、子どもたちの「知りたい、調べたい」につながるように使うことで、知識や技能が身に付いていくようにしていきたい。